

異文化理解教育の先駆者たち

第9回 スターリング・M・プラタ デ・ラ・サール大学准教授
自立した学習者の育成が国の競争力を高める



フィリピンのデ・ラ・サール大学の英語・応用言語学部で准教授を務めるスターリング・プラタ氏は、英語科目の試験や評価法に高い関心を持ち、研究と実践をしている人物です。彼女は、経済交流が進むASEANでフィリピンが経済的な成長を遂げるには英語力の向上が必須と考え、学生自身が自立的に学習できるようにする「ポートフォリオ評価」という手法に挑戦しています。その着眼点には神田外語大学が永年取り組んできた「自立学習者」の教育と高い共通性がありました。（構成・文：山口剛 / 写真：山口雄太郎 / 文中敬称略）

幼い頃から英語の本を読むことが好きだったスターリング・プラタは、ごく自然に英語を専攻するようになった。デ・ラ・サール大学の大学院に進学すると、「特殊目的のための英語」という分野を専攻した。プラタはこの分野を学術的に研究するとともに、仕事の現場で必要とされる英語を指導するために、カリキュラムを構築し、研修を行うプロジェクトにも関わってきた。

例えば、フィリピン航空とのプロジェクトでは、手荷物受取所に勤務するスタッフ向けに「苦情調整状」の書き方を研修した。旅客機の乗客が手荷物を紛失した際に、その処理に必要な英語の表現を指導していくのだ。

また、フィリピンは欧米に比べると人件費が安く、英語が公用語であることから、アメリカ資本の企業のコールセンターが数多くある。アメリカからかけた問い合わせの電話に、太平洋を越えたフィリピンにいるスタッフが対応するのだ。ある会社のプロジェクトに関わったプラタは、フィリピン英語とアメリカ英語の違いを徹底的に研究したという。



「フィリピン英語の問題は、主語と動詞の呼応です。主語が変わっても、動詞が変化しないのです。こういった問題の背景にはフィリピン特有の事情が関係しています。まず、フィリピンには読書の習慣がありません。情報の多くは新聞や本ではなく、テレビを通じて得ています。生活が苦しい親は、子どもに本を買ってあげられません。学校は予算がなく、教材が十分にそろえられないという現状もあります」

学校での英語教育にも問題があるとプラタは指摘する。中学校や高校の英語の授業の多くは文法や読解、作文に多くの時間を割いている。一方で、リスニングやコミュニケーションの授業は後回しにされているのだ。高校では、非常に難しい文法を学ばせる英語教員もいる。

プラタは現在、大学で英語教員を養成するコースも担当しているが、「高校生たちは言語学者になるわけじゃないから、そんな難しい文法を教える必要はない」と指導することがある。家庭の読書環境、そして学校での教材不足や指導内容の偏りが、フィリピン人の英語能力を高めることを阻害しているとプラタは指摘するのである。(1/4)

異文化理解教育の先駆者たち

第9回 スターリング・M・プラタ デ・ラ・サール大学准教授
自立した学習者の育成が国の競争力を高める



学生自身が自己評価によって学力を高める 「ポートフォリオ評価」を実践する

平成10（1998）年7月に博士号を取得し、母校のデ・ラ・サール大学で英語教科を教え始めたプラタは、学生の評価法に関する調査研究にも力を入れていった。その背景には、「テストのための英語教育」を改革しなければならないという問題意識があった。学生の成績は、教員の評価でもあり、また学校の評価にもなる。政府が実施する統一テストの試験問題は選択式である。そのテストでよい点を取るために、教員たちは授業の内容を立案する。社会で求められるコミュニケーション力、文章作成力を育成するためではないのである。

平成12（2000）年4月、プラタは東南アジア教育大臣機構（SEAMEO）の地域言語センターから「言語に関する試験と評価における専門家」としての認証を得て、シンガポールにおける英語教育の改革に関わる経験も積んできた。

平成13（2001）年、デ・ラ・サール大学のプラタが教える学部で、英語の科目を履修する学生たちが、期末テストを受けたくないと言いつつ出たことがあった。そこでプラタは、「ポートフォリオ評価」という評価法の導入を学部に提案した。

大学のシラバスには、それぞれの科目に学習を通じた到達目標が明記されている。一般的には、学期末に教員が試験を行って学生の到達度合いを評価する。一方のポートフォリオ評価は、学生自らが学習した内容を常に振り返りながら、自分自身を評価し、到達目標に向かって学力を高めていくという手法だ。



ここで言う「ポートフォリオ」とは、目標に向かって行った学習から生まれたノート、プリント、発表資料、レポートなどの成果物をファイリングしたものを指す。この手法を実践したプラタは、学生のポートフォリオがルールに沿って作られているか、どこまで完成しているかを基準に学生の評価を行った。プラタはポートフォリオ評価を通じて得られる成果について次のように説明する。

「学生はクラスの外に出してしまえば、教員から自分の学習が十分かどうかを指導してもらえません。学生が自身のポートフォリオを持ち、自分を評価できれば、教員がいなくても自立して学べます。

学生は自分の長所を理解できませんが、弱点は知っています。弱点を克服するには、まず自分の目標や方向性を設定する必要があります。目標を達成するために、自分の能力を向上させる方法を身につけ、そして自分自身を評価する方法を学ぶのです。それは学生が自らの学習に責任を持つことでもあります。

社会に出て、企業で業績を挙げていくためには、自分自身で課題を発見し、解決する手法を見だし、その結果も評価しなければなりません。学生は社会で働くことを前提に学んでいるのですから、学校でも社会の評価方法と共通性のあるものを採用すべきだと私は考えます」 (2/4)

異文化理解教育の先駆者たち

第9回 スターリング・M・プラタ デ・ラ・サール大学准教授
自立した学習者の育成が国の競争力を高める



教育の中心は、「教えること」から 「学ぶこと」に変わるべきである

学生に自立して学ぶ力を身につけさせようというプラタの取り組みは、神田外語大学の教育と高い共通性がある。同大学では平成元（1989）年に英語の自立学習機関であるELI（English Language Institute）を設立した。所長を務めたのは外国語学部英米語学科教授のフランシス・ジョンソンだった。

オーストラリア出身のジョンソンは、パプアニューギニアや香港の大学で教えながら、外国語として英語を学ぶ人々向けのテキストを数多く執筆してきた。一方で、「自立学習者」という概念を研究し、その成果を神田外語大学のELIで実践した。

ELIには専任の教員が常駐した。教員は英語を母国語とし、第二言語としての英語教授法（TESL：Teaching English as a Second Language）の修士号を取得した20代の若者たちである。アメリカやイングランドだけでなく、オーストラリアやシンガポール、南アフリカ共和国、スコットランドからも教員を集めた。ELIを訪れる学生は、年齢の近い外国人教員たちとのコミュニケーションを通じて、世界の多種多様な英語に触れながら、英語を発話する力を養う機会を得たのだ。

当時、外国語大学では、外国語は教員が講義を通じて教えるものだという考えが一般的だった。一方のジョンソンは、学生が自分で学習計画を立案し、クラスメートと協力し合い、膨大な量のコミュニケーションを生み出しながら英語を学び、最終的には学生一人ひとりの習熟度合いに合ったカリキュラムを構築することが重要だと考えていた。まさに、自立学習者の育成である。



学生が受け身で学ぶ日本式の外国語教育。学生が自発的に外国語力を習得していく自立学習。両者は考え方が根本的に異なる。ELI設立当初、英米語学科の教員からの反発も多かったという。その逸話からもELIがいかに画期的なものだったかが理解できる。だが、ELIの取り組みはやがて評価されていく。

平成15（2003）年、神田外語大学ではELIでの研究を集約したSALC（Self-Access Learning Center）を開設した。学生はELIの英語教員と英語でコミュニケーションし、学習意欲を高める。施設には充実した教材や機材がそろい、学習アドバイザーが常駐する。現在、神田外語大学では大学間教育連携事業として、SALCのカリキュラムや教員を包括的なソリューションとして、他大学に提供している。ジョンソンは神田外語大学が進むべき教育の方向性についてこう語っている。

「私は、教育の中心が、『教えること』から『学ぶこと』に変わるべきだと考えています。教育の主役は教員ではなく、学ぶ者です。よい教え方とは、学生がどれだけ自分で学べるようになったかで計るべきです。教員が学びの主役が誰であるかをしっかりと考えられれば、私たちは大きな貢献ができるはずです」（3/4）

異文化理解教育の先駆者たち

第9回 スターリング・M・プラタ デ・ラ・サール大学准教授
自立した学習者の育成が国の競争力を高める



ASEAN経済共同体での競争力を高めるには 自立した英語学習と異文化理解が必要

平成27（2015）年12月31日、ASEAN経済共同体（AEC）が発足した。10カ国が参加し、域内の総人口は約6億2000万人に上る。総生産額2兆5000億ドル（約300兆円）という巨大な経済圏が動き始めた。プラタは、AEC域内での経済活動が活発化することを前提に、英語教育も見直さなければならないと指摘する。

「AECでの共通語として英語はどのようなものになるのか、強い関心を抱いています。ASEANの各国では、それぞれ異なる英語が話されていますから、私たちは多様な英語を理解し、話せるようになる必要があります。大学で教える英語のスピーキングの授業も変えていかなければなりません。異文化コミュニケーションの視点も重要です。文化が異なれば、話してよいこと、いけないことも異なります。相手に失礼にならない会話の方法や話題を学ばなければなりません。コミュニケーションをする相手の文化と規範を学ぶ必要があるのです。

ブルネイでは莫大な予算をかけて、米国ハワイ州の研究機関、イースト・ウエスト・センターで政府官僚の英語研修を行っています。今後、フィリピンはシンガポールやブルネイといった国々と競っていかねばなりません。フィリピン人の英語力が劣っていれば、遅れをとることになります。私は、フィリピン、そしてASEANにおける英語教育に、学生の自己評価を導入することを目指して研究と教育の活動を続けていきたいと考えています」



新たな経済圏の登場によって、ダイナミックな人的交流が始まろうとしているASEAN。自国の経済を強くするためには、自立した英語学習が必要だとプラタは指摘する。日本もまた、グローバル化のうねりのなかにいる。日本人がアジアをはじめとする諸外国の人々と渡り合っていくためには、英語のコミュニケーション力を高めることは不可欠である。自発的に他者と交わりながらコミュニケーション力を高め、継続して学び続ける自立学習。神田外語大学が先駆的に取り組んできたその教育手法が真価を発揮する時代が訪れたと言えるだろう。(4/4)

スターリング・M・プラタ (Sterling M. Plata)

昭和40 (1965) 年、フィリピンのラグナ州に生まれる。平成10 (1998) 年、デ・ラ・サール大学で文学博士号 (言語および文学) を取得。企業における職業訓練としての英語研修のカリキュラムづくりなどに携わるとともに、学生が自立して学び続ける「ポートフォリオ評価」の研究と実践を続けている。東南アジア諸国全体の英語教育の改革にも熱心で、平成12 (2000) 年4月には、東南アジア教育大臣機構 (SEAMEO) 地域言語センターから「言語に関する試験と評価における専門家」の認証を取得。現在は、デ・ラ・サール大学の英語・応用言語学部で准教授を務める。